

# 炭焼長者型説話の構造

伊藤清司

中国の「炭焼長者型」の説話は△初婚型▽と△再婚型▽に大別されるが、両者はおおむね同一構造をもっている。すなわち、△初婚型▽は、

〔事例〕(1) 「灶神故事(甲)」 湖南・湘西

(2) 「乞食婿」 広東

(3) 「月亮裡天丹樹故事」 広西

(4) 「甚麼最宝贵」 採集地不詳

高官ないし大金持に三人の娘がいる。  
その末娘のみが父の意見に沿わない。

末娘が勘当同然の身となり、乞食あるいは柴刈りなどの妻になる。

この夫婦が黄金を発見し、大金持になる。

娘を勘当した父はそれを恥じて死ぬ。または零落する。  
という内容である。

これに対し、△再婚型▽は、

〔事例〕(1) 「灶神故事(乙)」 湖南・湘西

(2) 「夫婦比福成竈神」 浙江・上虞

(3) 「灶菩薩的故事」 河南

(4) 「灶君」 広東・翁源

(5) 「灶君的来历」 台湾

夫婦がおり、夫が妻を離縁する。  
妻は別の男と再婚する。

この新しい夫婦は金持となる。

前夫が零落して乞食となり、前妻の家とは知らず、その門口に立つ。

前夫は自己の不運を嘆き、かつ、恥じて死ぬ。  
前妻は前夫を灶神として祀る。

という内容であるが、この△再婚型▽の後半部の灶神の一件を除けば、娘を勘当した父親と妻を離縁した前夫との置換によって、△初婚型▽⇄△再婚型▽の移行がきわめて容易であることが理解され、かつ、この「炭焼長者型」説話の「運命譚」としての特質をよく示唆しているものと思われる。

ところで、中国の当該説話の△初婚型▽はその結末部の相違によってA・B二つのタイプに分類が可能である。そのうちAタイプは「事例」(1)から(4)によって略述したような、はじめ富裕な父親が、のちに零落し、または不運(死など)に陥入るといふ結末であるが、これに対しBタイプは、

〔事例〕(5) 「鞭角莊」 雲南・洱源

(6) 「命運的故事(二)」 江蘇・無錫

(7) 「水蛙記」 台湾

(8) 「海螺姑娘」

西藏・昌都

(9) 「昆明是誰造成的」

雲南・昆明

(10) 「乞丐艷遇」

採集地不詳

父によって家出を余儀なくされたが、結婚後、富裕となった娘が勘当した父親に孝養を尽すことで結末となっている。おそらく、このタイプは△初婚型▽Aタイプの派生型であると推定される。

朝鮮半島にも「炭焼長者型」説話がみとめられるが、

〔事例〕

(1) 「三人の娘」

金羅北・鎮安

(2) 崔『韓国昔話の研究』

忠清南・天安その他

(3) 曹『採録説話』

忠清北・丹陽

(4) 「三公本解」

濟州

(5) 『三國史記』

高句麗溫達

(6) 『三國遺事』

百濟武王

その大部分は△初婚型▽のBタイプであって、中国と朝鮮半島間のこのタイプの構造上の一致はとくに顕著で、その間の歴史的関係は否定できないものとみて誤りがなであろう。

つぎに日本の「炭焼長者型」説話の△初婚型▽・△再婚型▽（事例）は関『日本昔話大成』のそれによる）のうち、前者は中国・朝鮮のそれらに比較して、基本的構造の一致に拘らず、父親の存在意義が著しく稀薄であり、これに対応して、その結末部における父親の扱い方が欠落し、あるいは薄弱であるという特色をもっている。そしてこの父親の存在に代るものとして、あるいはその意義を補うものとして、娘と炭焼きとの結縁に、総じて神意ともいふべき超自然的な存在の介在が強調される傾向がつよい。一例をもって示せば、

金持ちに一人娘がおり、不縁である。ある夜の神のお告げに従つ

て、某地の山奥で炭焼く男の嫁となり、のち黄金を発見して、富裕となる。

という内容で、その神のお告げに代って、卜占、夢見、あるいは牛馬の行くままなど、神意の範疇に属するものが置換され、父親の存在感はやや少ない。このような内容の説話をA・B両タイプに対し、△初婚型▽Cタイプとして分類することが可能である。

もちろん、日本の△初婚型▽はすべてCタイプというのではなく、父親の存在が明確にされているものも少なくない。たとえば、鳥取の西伯、兵庫の城崎、長野の下伊那、岩手の二戸などの説話では、縁の薄い娘の嫁入先について、父親が日夜心配し、時には、山奥の炭焼きの葎屋まで出かけて行くような慈父型ともいふべき例話もあるにはある。しかし、上述のA・B両タイプにおける父親の存在意義とは著しく相異しており、したがって、説話の結末部にこの父親の再登場することはまずない、といつてよい。なお、勘当型ともいふべきA・Bタイプも、日本には皆無ではない。石川の珠洲のほか、鹿児島の大島や沖永良部など西南地方に散見している。しかし、その数は限られ、分布にも特徴があり、日本の「炭焼長者型」説話△初婚型▽の主流を占めるにはほど遠い。ただし、勘当型の存在する事実には注目に値する。

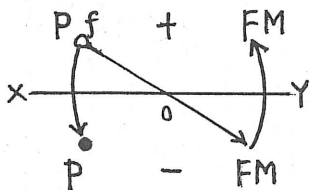
日本の民間にも△再婚型▽が相当数分布しており、その結末部、つまり前夫の末路が、恥じて死ぬもの（沖繩の宜野湾など）と零落して前妻の家に仕えるもの（山梨の西八代など）に細分できるが、その前夫が死んで竈神として祭祀の対象となることを明言する中国△再婚型▽のそれは寡聞にして知らない。

以上、略述した中国・朝鮮・日本の△初婚型▽・△再婚型▽の構造を図示すればつぎのごとくである。

中国

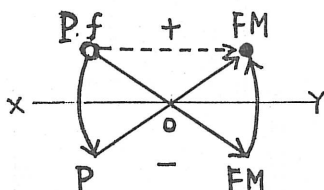
〔初婚型〕

Aタイプ



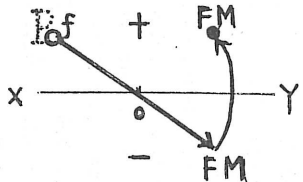
朝鮮

〔初婚型〕

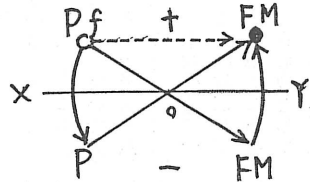


日本

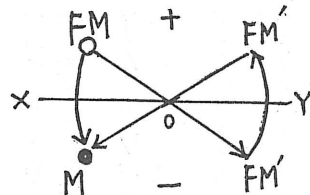
〔初婚型〕



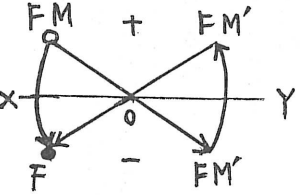
Bタイプ



〔再婚型〕



〔再婚型〕



〔凡例〕XY軸の上部十は幸福・富裕などを、一は不幸・貧困・死などを表わす。Pは父親。(ただしfは存在意義稀薄な父親を示す) fは娘、その結婚後はF。MはFの夫、ただしMは再婚の夫。↓は物語の展開の方向を表わす。ただし、!↓は例外的に、父親が別に破綻には至らないまま、娘夫婦に好意的に迎え入れられて結末となるケースのあることを示す。○印は物語の発端、●印はその結着点。

以上の図は△初婚型▽でf、△再婚型▽でFがそれぞれO点を通ってマイナスの領域に移るに伴い、△初婚型▽ではPとMが、△再婚型▽ではMとM'の位置が逆転する。つまり、O点を中心にプラスとマイナスの関係がシーソー式に移動していることを示す。

以上にみるように、東アジア(中国・朝鮮半島・日本列島)における「炭焼長者型」説話間に構造上の著しい類似が指摘できる。そのいずれが原型かは速断できないとしても、すでに言及したように、△初婚型▽と△再婚型▽の関係はきわめてフレキシビリティで、説話の主人公である福運をもつ女を娘とすれば、彼女を一旦マイナスの領域に追いやるのは父親となり、同じく妻とすれば、それは夫となるという換置自在の関係である。ただし、中国の△再婚型▽では結末部に竈神の由来が語られ、日本の民間説話ではこの部分が欠落している。

つぎに日本の多くの△初婚型▽の構造はやや異例である。おそらくは、父親の存在意義の稀薄化に伴って、後半部が欠落していった変形とみていいであろう。中国・朝鮮の△初婚型▽Bタイプもおそらく発展形で、とくに朝鮮半島にこのタイプが多く認められるのは著しい傾向であって、両親に孝養を尽す要素はひろく朝鮮の民間説

話に認められる特徴となっている。

総じていえば、東アジアの「炭焼長者型」説話は八初婚型Vと八再婚型Vを問わず、しかも中国・朝鮮・日本などの地域（紙面の都合上、東南アジア地域など事例には言及しない）を問わず、同型の構造を共有しており（またはいた）、それがさまざまな発展形・変形を生んでいったものと推定される。

この型の説話の発生に関する一元論的な推論の妥当性は各地域の説話を構成する諸要素間の比較により補強される。まず八初婚型Vの女主人について、中国ではほとんどが三人姉妹の中の末娘とし、（事例）(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(10)のみに二人姉妹。ただしこの説話では父の後妻が登場。その結果、娘は姉妹に変化）朝鮮でも同様三人姉妹の下の娘。（事例）(1)・(2)・(4)・(5)・(6)ただし(3)のみ不詳）この点でも、中・朝間の関係は緊密である。これに対し、父親の存在意義の稀薄な日本では、複数の娘たちのうち一人だけが父の意見に沿わないため云々という部分がなく、そのため、その娘の姉妹中の上下などは余り問題とはされない。しかし、新潟・佐渡に、三人姉妹の中の一人が説話の主人公（ただし、姉娘で、神のお告げで押掛け女房となる）となっている事例がある。

幸福な結婚への案内が超自然的存在であるのが、日本の八初婚型Vの特色である点についてはすでに触れたが、中国（事例）(2)朝鮮（事例）(2)にも皆無ではないが、Cタイプはおそらく日本の土壌において特に発達したものである。なお、この超自然的存在の範疇に入れてよいと思われるのが、女が乗った牛や馬に導かれて押掛け女房になるケースで、これは日本にもみられる（青森・三戸その他）が、それは中国にもしばしば認められる（事例）(1)・(4)・(5)・(9)・(11)。この事実は一なる偶然の類似であるとして見過すわけ

にはいかならない要素である。

つぎに八初婚型Vの夫の職業は時に例外もあるが、日本では大抵は炭焼きときまっている。中国では数は必ずしも多くないが、やはり炭焼きとする例が認められ、（事例）(1)・(5)とくにこの種の説話では物語の展開の細部において、日本の説話と最も近似しているのは注目すべきである。日本においては夫の稼業を山中の炭焼きとするもの以外で眼につくのは芋掘りであるが、朝鮮でも炭焼きとするもの（事例）(1)・(2)・(3)以外に、同じ芋掘りとする例がある。

（事例）(4)・(6)朝鮮と日本の芋掘り型の発生的な本末関係については目下未詳であるが、両者は東アジアに広く分布する「炭焼長者型」説話の一亜型で、両者は日本と朝鮮で個別に発生したとは考えがたい。この点については既に論じたので（『日本昔話大成 研究篇』参照）これ以上は触れない。

夫婦が金発見に至る過程に動物が登場する点にも類似が認められる。妻が持参した小判を夫に与え、町に買物にやる。夫はその小判の価値を知らずに、路傍の犬・馬その他の動物につぶて代りに投げつけて、手ぶらで戻る。これがはじめ黄金に無知だった夫の口から黄金の山の所在を語られる端緒となったというのが、日本の「炭焼長者型」説話中の最も聞き手の興味を誘う場面であるが、中国でもそれはほとんど同じである。（事例）(1)・(5)・(7)・(11)

最後に、中国の八再婚型Vの結末は灶神の由来譚（事例）(1)・(13)・(14)。別に八初婚型Vで父が慙死し、竈神となる例（事例）(1)であるのに対し、日本では民間説話の八再婚型Vにはそれが無い。しかし『大和物語』の「芦刈」その他の古書に、それが残っている。（ほかに、産神問答型の説話などに灶神が登場する）

以上の考察から、アジアの「炭焼長者型」説話は、おそらく「運

命譚」の類の共通の伝承が「初婚型」Vと「再婚型」Vの二型に展開し、伝承と伝播の過程で、さらにさまざまな発展を遂げ、たとえば、一部の地方で、夫の稼業を芋掘りとするものに変じ、それがのち、朝鮮半島と日本列島でそれぞれさらに独自の発展を示した。あるいはまた娘を勤当した父親に富裕になった娘夫婦が孝養をいたす結果の話が生じ、それが中国と朝鮮でそれぞれ独自に展開し、とくに後者では好んで語られて普及し、朝鮮の特徴となった。他方、日本では幸福な結婚への案内に神が介在し、それに反比例して、父親の影が薄弱化するという特色を示している、云々の仮説が想定できよう。

いづれにしても、日本の「炭焼長者型」説話を含めて、東アジアの同型の説話は、上にのべた構造的視点を含めた広い比較研究によって再検討を進める必要がある。

(いとう せいじ・慶応大学)

## 新たな伝説研究への道を拓く

# 日本伝説大系 全15巻 別巻1

編集委員 ■ 荒木博之・野村純一・福田晃・宮田登・渡邊昭五

多くの伝説資料のなから、地域別に代表的な例話資料を選び、これを文化叙事伝説と自然説明伝説に大別し、さらに類話資料・参考資料文献資料で補強した。

昔話に較べ停滞していた伝説研究への道を拓く、民俗・口承文芸・郷土教育の研究者・愛好者・必備の図書。

### ● 全巻内容

- ① 北海道・北奥羽(北海道・青森)
- ② 中奥羽(岩手・秋田・宮城)
- ③ 南奥羽・越後(山形・福島・新潟)
- ④ 北関東(茨城・栃木・群馬)
- ⑤ 南関東(千葉・埼玉・東京・神奈川・山梨)
- ⑥ 北陸(富山・石川・福井)
- ⑦ 中部(長野・静岡・愛知・岐阜)
- ⑧ 北近畿(滋賀・京都・兵庫)
- ⑨ 南近畿(三重・奈良・大阪・和歌山)
- ⑩ 山陽岡山・広島・山口
- ⑪ 山陰(鳥取・島根)
- ⑫ 四国(香川・愛媛・徳島・高知)
- ⑬ 北九州福岡・大分・佐賀・長崎
- ⑭ 南九州(熊本・宮崎・鹿児島)
- ⑮ 南島(奄美・沖縄)

別巻 研究・索引編

● 菊判変型・上製函入

定価 各四、〇〇〇円 千 300

● 白又キ数字既刊

次回「山陰編」7月刊(予定)

東京都千代田区神田小川町三十一番一三  
電話(三)五(一)七三六 振替東京三〇三〇〇〇

みずうみ書房